此の小路は、升形白尾屋とて舊家の藥店あり。此の藥店の家の横町なるに依りて、白尾屋小路と呼べり。此の小路は升形より長町へ通ふ往來なり。

○白尾屋吉郎兵衞傳

白尾屋は、金澤市中舊家の町人にて、元祖以來世々吉郎兵衞と俗稱す。舊傳に云ふ。昔中納言利常卿の時、元祖白尾屋吉郎兵衞初て此の地なる升形に居宅を下し、爰に居住す。二代白尾屋吉郎兵衞初て賣藥營業幷に藥種の商業をなさんと、元祿七年夏四月三日初て開店をなし、夫れより今明治維新の良辰に至り、凡二百許年商店をなしたり。其の家傳の藥方中、赤龍丹・目藥紅梅散の兩藥は、白尾屋の赤龍丹・白尾屋の目藥と稱し、世人殊に良藥となしけり。元祖以來の舊記・書札ありしといへども、元祿三年三月十七日宗叔(町)燒の時、居宅火災に罹り、家傳の書類等悉く燒亡して、先祖の由緒來歷等詳かならず。當町創立以來爰に居住し、凡其の年曆貳百五十餘年に及び、歷代連綿して營業すといひ傳ふるのみ。

○俳人梅室出生地

梅室紀年錄に云ふ。姓は橘、氏は櫻井、諱は能充、初め雪雄、後素信と稱す。梅室・又方圓齋・陸々・遲速庵・餘花園・寒松庵・相應軒等の號あり。明和六年霜月廿七日加賀國金澤升形に生る。幼名次郎作、父は新九郎、母は中村氏、其の先は大和櫻井の人、相鈳に名あるを以て、加賀侯瑞龍公召され、月俸の恩賜あり。後硎刀を以て、世々國君に仕ふ。文化元年三十六歲、病を以て仕を致し、弟子某に業をゆづりて、俳諧に遊ぶ。これより先、闌更先生に俳諧を學ぶ事年あり。此のとしより槐庵をあづかりて、加越の間に遊歷す。其の後諸國を遊歷し、文政九年五十八歲にて薙髮し、後京都に居留り、嘉永元年二月八十の賀宴。同四年四月十五日年來俳道執心あり殊勝の旨、銅駝御殿達御聽に被召といへども、衰老により再三辭退あり。然れども御ゆるしなかりしかば、參殿は御斷申上げ、門人石堂・執筆杜夢參殿、此の日花下宗匠の御免狀を下さる。同五年、水無月の暑さたへがたき頃より、こゝち例ならず。葉月六日より床をまうけて、座右の人々看病に手をつくし、至らぬくまもなかりしとなん。かくて長月十八日の朝、

ひとしづくけふのいのちぞ菊の露

病翁としるして、人々にも發句して見せよかしと、いといと機嫌よかりしとかや。十月朔日趺座して、我わすれゐるしことこそあれ。さいつころ肥後人蕉翁の靈を祀り、かたはら碑を造立して、我に句を求む。我又諾うてこゝにおよべり。今これを送らむと筆をとらる。かたへの人々、かゝるきはにいかでさることを心になかけ給ひそと、とにかく諫めけれど、いやとよ、雲堂旦過の身のかくやすらかに終ること、これ蕉翁のたまものならずやと遂に、

石の戸にいつまで草の紅葉哉

てふ舊作を、水ぐきのあとうるはしくしたゝめられ、筆かいやり、奄然として午の刻に歿。享年八十四。同三日葬儀をいとなみ、寺町廣小路の北本禪寺にをさむ。碑銘梅室之墓とあり。といへり。今按ずるに、梅室が著述せし梅林茶談に、余十六歲はじめて俳諧に携り、三十五歲にして此の道の遊民となれり。と記載す。或は云ふ。梅室同時代に、優人中村歌右衞門・相撲人阿武松綠之助共に加藩の出生にて、世に三傑と稱し、共に其の名を天下にとゞろかせりといへり。梅室が著せる行々子の跋にも、梅室大人は若かりしより四方に遊び、京攝の間に杖をとゝむること二十年、または東都に菴を下し、諸好子を導くこと十年。その間もばら祖翁の風骨を探り、不易流行の機變に熟して、今や名海内にとゞろく。こたび三十年を經て、古鄉に杖をかへさる。と云ひ、又、花乃賀集とて、加能越三州の發句共を集めたる、その自序には、此賀筵の長久ならん事をことほぎて、八十一の翁梅室誌。とあり。

○升形弓町

此の町は、元祿六年の士帳に、安江木町の後。弓町と載せたる地にて、升形の裏町也。舊藩中は諸士の邸地のみにして、他の弓町とは異也。或は云ふ。弓町と呼べる地は、皆舊藩中弓組足輕の組地にて、小立野弓町・長田弓町・木ノ新保弓町等皆同じ。升形弓町のみは、諸士の邸地にて、輕卒の組地にあらず。此の地はそのかみ射手士の邸地に賜はり、射手の諸士爰に居住す。故に弓町と呼べり。今此の町のみたゞ弓町と稱すといへり。

○射手士來歷